

11月 9日 (日) 創世記 10章	「地上の諸民族は洪水の後、彼らから分かれ出た」(32節)。「創世記」は旧約の信仰者たちが、「今の我々の世はどのようにして成ったのか」を祈りとともに思い巡らしながら記した書と言える。「洪水」の痛みと、生存者ノアのスッキリしない人生を受け継いで、筆者たちが認識の限りを尽くして綴った多様な民族・家族の系図。各人の名と地域を辿ってみよう。
10日 (月) 創世記 11章	「テラは、息子アブラムと・・・カルデヤのウルを出発し、カナン地方に向かった」(31節)。シンアルの地では「れんがとアスファルトの塔」を建てるほどの文明が栄えた(3-4節)。だが主はそれを良しとされず、寄留の地で暮らしていた小さな家族に何代も前から目を留めておられた。それが創世記の歴史観。「約束の子ら」の物語が始まる。
11日 (火) 創世記 12章	「ところが主は、アブラムの妻サライのことで、ファラオと宮廷の人々を恐ろしい病気にかからせた」(17節)。神の祝福の源(2節)となるどころか、妻サライを犠牲にファラオから富の祝福を受けるアブラム。「ところが」主の御手がサライのために動く。解放されたのはサライのみならず、ファラオの力にへつらっていたアブラムも。「彼女のゆえに(16節)」得た真の幸い。
12日 (水) 創世記 13章	「その土地は、彼ら(アブラムとロト)と一緒に住むには十分ではなかった。彼らの財産が多すぎたから、一緒に住むことができなかったのである」(6節)。財産が増えすぎて持ち主が窮屈になる、「愚かな金持ち(ルカ12:17)」にも似た皮肉。しかし土地は神から与えられることを知っていたのか、アブラムはロトに望みの土地を選ばせて別れ、賢くも争いを避けた。

13日 (木) 創世記 14章	「逃げ延びた一人の男がヘブライ人アブラムのもとに来て、その(ロトが連れ去られた)ことを知らせた」(13節)。この「逃げ延びた一人」がもし、そのままどこかに行ってしまったら、ロトは救出されずに終わったことになる。私たちは日々、主の憐れみによっていろいろな危機から「逃げ延びた一人」なのかも知れない。そのままで済ませるか、どうしようか？
14日 (金) 創世記 15章	「主は彼を外に連れ出して言われた。『天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい』」(5節)。「自分の子孫、自分の家」に気持ちが入り込み、内に縮こまってしまっているアブラムを主は外に連れ出し、無限に広がる夜空の星々の輝きに目を向けさせる。開いた心に主の約束がスッと入ってきたのだろう。「信仰による義」も、主の導きあってこそ。
15日 (土) 創世記 16章	「神がわたしを顧みられた後もなお、わたしはここで見続けたではないか」(13節)。「顧みる」は「気づかう」。誰にも顧みられなかった奴隷ハガルを唯一顧みてくださった神。まるでイザヤ書で歌われる捕囚のシオンと主なる神の関係のようだ。ハガルは驚嘆をもって、御使いが去ったあとも消えない主の存在感に思いを巡らせたのだろう。主は共におられる神。
16日 (日) 創世記 17章	「主はアブラムに現れて言われた。『わたしは全能の神である。あなたはわたしに従って歩み、全き者となりなさい』」(1節)。「全能」とは英語でオールマイティ。トランプでは何でもできる切り札。ただ聖書の「全能の神」はゲームの神ではない。愛における全能であり、自ら小さく貧しくなる全能である。強さを誇るのではなく、小さく貧しくなる信仰を祈り求めたい。